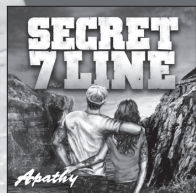


彼らがステージから見る光景は素晴らしいものになるだろう

SECRET 7 LINE



2010年1月、セルフタイトルとなる2ndアルバムをリリースし、同作レコ発ツアーや数多くの大型イベント出演、中国及び韓国ツアーなど、タフな現場で経験を積み重ねて来たSECRET 7 LINE。ひとつひとつのステージで身体と魂で感じた様々なものを糧にして、シーン我代表するライブバンドへと変貌を遂げた彼ら。待望の3rdアルバムは、そんな彼らが持つ天性のセンスを幾多の経験でコーティングした最強のライブチューン。2011年、彼らがステージから見る光景は素晴らしいものになるだろう。



New Album
『APATHY』
Kick Rock MUSIC
EKRM-1169
¥2,300(税込)
2011/1/12 Release

<http://secret7line.com/>

INTERVIEW#1

「場数を踏んでいくことによって、自分の中での正解をいくつも見付けてきた1年だった」

●1stアルバム『How many lines does she hide?』(2008年10月)はそのときの等身大を詰め込んだアルバムで、ライブを重ねるに従って「もっともっとお客さんと一緒に楽しみたい」という欲求が出て来て2ndアルバム『SECRET 7 LINE』(2010年1月)を作ったという経緯がありましたよね。その2ndアルバム『SECRET 7 LINE』のリリース及びツアーで始まった2010年はどうでしたか？

RYO: 忙しかったですね。ライブは年間100本近くやっただんですけど、自分たち自身1年前と比べて変わったという実感があって。

●どういふところが変わりました？

RYO: ライブに対して自分たちが求めるレベルがより高くなったと思いますし、ライブ自体の組み立てとかもしっかり考えるようになった。それは細かいところまでキチッと考えて作ってるという話じゃなくて、意識が高くなったというか。

●2ndアルバム『SECRET 7 LINE』のツアー前半の横浜FADとファイナルの新宿LOFTを観たんですけど、1本のツアーの間でもかなりライブがしっかりしたような印象があって。更につい最近ライブを観たんですけど、1年前と比べてお客さんの一体感が全然違うと感じました。技術的な成長もあると思いますが、メンタル的な成長が大きいような気がするんです。

TAKESHI: やっぱツアーが長かったということもあり、単純に場数を踏んだからということも大きかったような気がするんです。で、ツアーをやっていくにつれてお客さんも前より増えていって、だからお客さんとの信頼関係というか、「ここでこうなる」みたいな呼吸感が出て来たような気がしています。お客さんが求めているものが明確にわかってきたとい

うか。そういう経験が自信になって、先ほど言われた「メンタル的な成長」に繋がっていると思うんです。やっぱり経験が結構デカいと俺は思いますね。

●なるほど。

RYO: あと俺は思うんですけど、やっぱり経験がデカいですよね。

SHINJI: 他の2人がどう思ってるかわからないですけど、やっぱり経験やと思うんですよ。

●あつ、バクった。

SHINJI: “これはお客さんがついてきてくれる/これはついてきてくれない”っていうことがわかったというか、アクションももちろんそうですけど、気持ちがついてくる/こないっていうところも含めて、それは本当にちょっとしたことで変わるという実感があって、表現の差だったり口調の差だったりとか。場数を踏んでいくことによって、自分の中での正解をいくつも見付けてきた1年だった。それが自信に繋がったんじゃないですかね。

RYO: 別に頭で考えながら何かを演じるということではなくて、肌で感じてきたことを実践してきたというか、雰囲気を描んでいったというか。

SHINJI: あと、対バンした他のバンドとか観てて刺激を受けたり勉強すること多かったです。他のバンドをお客さんとして観ていて、気持ちを持っていかれる瞬間があって。“なぜ気持ちを持っていかれたのかな?”って考えて、自分たちの表現に繋がっていったんです。

●そういうことを色々考えたのは、“ライブでお客さんと一緒に盛り上がりたい”という想いが根底にあるからですよね。その気持ちが以前と比べてより強くなっているんでしょうね。

TAKESHI: うん。2ndアルバム『SECRET 7 LINE』は“ライブでお客さんと一緒に盛り上がりたい”と

INTERVIEW#2

「確かにこの曲ができたときは手応えがあったんですけど、初めてライブで演ったときはちょっと自分でもびっくりしました」

●アルバム『APATHY』なんですけど、いつ作ってたんですか？

RYO: 6月のツアーファイナルが終わった瞬間からは次のアルバムの準備に入っていました。曲を作りながらライブをやっていたというか。

●つい先日Fear, and Loathing in Las Vegas レコ発(12/9@新宿ACB)でもM-3. [DANCE LIKE NO TOMORROW]を演ってたんですけど、初めて聴くで盛り上がって掛けたんですけど、めちゃくちゃ盛り上がって掛けたんですけど、

「ライブでお客さんと一緒に楽しもう」っていう部分は更に意識しました。自分がお客さんとしてライブを観た場合、一緒に盛り上がる事ができるポイントがあるとやっぱり自分のテンションも上がるんですよ。そういうポイントを自分でも“作ろう”と思わなければ割とサラッとした曲になってしまふんですよ。

●RYOくんもSHINJIくんもまず鼻歌で曲を作りますもんね。

SHINJI: そうなんですよ。

RYO: 部屋の中でひとりメロディを作るんですけど、“ライブハウスにいる”とか“お客さんとしてライブを観ている”というイメージを想定して

作曲するようになったんです。

●ああ～、なるほど。

RYO: だから“無理矢理みんなをノラせよう”という感じではなくて、“お客さんとして盛り上がりた”という意識で曲を作っているかも。

●なんかそれはわかります。無理矢理感がない。世の中には“ここで盛り上げる”ということが見える音楽もあってそれはそれで別に悪いことではないと思いますが、今作はメロディや展開で聴く人の気持ちを温めてから盛り上がる、っていう感じ。SECRET 7 LINEは1stの頃からメロディに定評があるバンドだと僕は思っているんですけど、そこにライブハウスでの経験が加わった産物だと思う。

RYO: ギターを持って家で曲を作っているときでも“これいいな”と思う曲ができたときは、立ってギターを弾きながらじゃないと気がすまないくらいテンションにはなってますね。座ったままで終わる曲はアルバムの候補にもならないというか。もちろん曲にもよりますが、

●「立って」というのは、ちんちんのことではないですか？

RYO: どっちでも。立ってるし、動ってる。

●ダブルミーニングか。

SHINJI: 俺もライブを想像して作りまふね。これをこうしたら～ああ～！～ああ～、ああ～！って。●表情を見ているからわかりますけど、それを誌

